

見慣れたお寺

拙宅から4kmほど離れた所に、教学寺があります。浄土真宗西本願寺派の末寺で、昔からの集落のお寺です。お寺の名前を知る人は、地域の方だけ。地域外の人には〇〇集落の寺として認知するだけです。集落の生活に溶け込んだ風景のようなお寺です。

お寺に行くためには、車が通れないような細い路をたどります。路も狭いのですが、お堂も庭も小さな規模です。檀家だけでは寺を維持できず、住職が教員と兼業で維持してこられたのだろうと、筆者は決めつけています。

このお寺で、カルピスの創業者三島海雲が生まれました。1878年です。母親は同じ村の檀家・中道家の出身。お寺の台所事情をわきまえていたのでしょう。彼女は、海雲の学費を稼ぎ出すために、伊丹市で銭湯を経営します。優れた頭脳をもつものの、へそ曲がりの海雲は、高等小学校を中退。西本願寺の学校に進み、22歳で教職につきま。25歳で教師として中国に渡りますが、その学校は運営費を自ら稼がないといけない状況。このため海雲は経済活動に従事し、10年後には貿易会社を設立。馬の買い付けのために、内モンゴルを旅します。そこで発酵乳に出会い、モンゴル人が健康な理由は、放牧民が飲む発酵乳にあると考えます。

その後も海雲は緬羊の改良事業などに取組みますが、清国の滅亡で財産を失い、37歳



▲カルピスの生みの親、三島海雲誕生の地「教学寺」

(1915年)で日本に帰国。そこから乳酸飲料の開発に進み、4年後にカルピスを発売。大正時代の健康法ブームにも乗り、順調な成長を遂げたのが、カルピス社というわけです。

その後、海雲はカルピスの社長を長期間にわたって担い、1960年頃まで社長を続けます。当時の最年長経営者です。もっとも、その間に社長を辞めたり復帰したりもしています。

三島海雲のキャリアから、「野心、純心、無鉄砲」という3つの言葉が思い浮かびます。目の前の出来事に純粋な心で対応していると、時代に必要な行動ができてしまう。渋沢栄一にも通じるような、時代に活かされる人物像が浮かんできます。

前回、隣町の起業家を書いたので、今回は同郷箕面の起業家を、ちょっとだけ自慢してみました。(MBO実践支援センター代表)

